

社会・環境部会セッション

2020 年度社会・環境部会賞受賞記念講演

2020 Award Commemorative lecture of Social & Env.Div

(1) 社会調査で明らかになること／ならないこと

(1) What will be revealed /not to be revealed by social research

*齋藤 圭介

岡山大学

1. 社会学者は社会調査で何を明らかにしようとしているのか

社会という曖昧模糊とした研究対象を扱うために、社会学者は社会を捉える方法を試行錯誤してきた。現在、社会学者が用いる方法については、質的研究、量的研究、その他の3つに大別して説明することが一般的になりつつある。

分析の具体的な手続きについては各方法で大きくこととなるが、いずれの方法においても私たち社会学者が明らかにしようとしているのは人々の「主観的な意味世界」である。大胆に換言すれば、客観的な事実を暴くというスタイルの調査をジャーナリズム的な調査とかりに呼べるとすれば、社会学者が実施する調査は(客観性については判断を保留して)あくまで対象の人々が何を考えているのかを明らかにする調査といえる。

2. 社会調査で明らかになること／ならないこと

2.1. 質的調査法による社会調査で社会学者は何を明らかにしているのか

質的な社会調査とは、代表的にはインタビュー調査や現地のフィールドワークなどが有名である。調査対象者からお話を伺い、対象者の視線をとおして当該社会を記述しようとするアプローチである。対象者一人ひとりの個別性が高い生々しい語りをとおして、社会を垣間見ることになる。対象者から理路整然とした体系的な語りをきけることはまれであり、喜怒哀楽はもとより多くは葛藤や困惑、非常に個人的なエピソードなどの人間的な感情が吐露される。複雑な感情を抱え、一人ひとり異なる顔をもった生身の人間の語りをとおして、そうした人々が生活をしている社会の記述を目指すアプローチといえる。

2.2. 量的調査法による社会調査で社会学者は何を明らかにしているのか

量的アプローチとは、代表的には大規模な質問紙調査などが有名である。大量の質問紙(アンケート)を配布して、個人の情報をデータのかたちに変換することで、一人ひとりの感情やエピソードではなく、社会全体としての傾向を把握していこうとするアプローチである。分析のさいには、高度な統計学の知識を用いることもたびたびある。たとえば現在のコロナ禍において、私たちは感染者の数に注目し、その影響の大小を判断しがちである。ここでは感染者一人ひとりの顔はみえてこないが、量的アプローチは社会全体の動向を知るにはもっとも適した社会調査といえるのは間違いないし、感染症対策などの医療体制・社会政策を考えるさいには判断の根拠という意味できわめて重要な役割を担う。

2.3. その他の調査法による社会調査で社会学者は何を明らかにしているのか

主なものとして、文字(質的)データを量的な手法で扱うテキストマイニング、質的手法と量的手法の架橋を目指すQCA(質的比較分析)、質的手法と量的手法を1つの研究プロジェクト内で使い分ける混合研究方法などがある。これらの手法は総じて比較的新しい調査手法といえるため、こうした第3の調査方法の評価(社会調査としての有効性や限界などの評価)にはもう少しばかり時間が必要といえるかもしれない。

3. 共同研究の必要性

社会にアプローチするためには、多様な方法を適切に組み合わせて取り組むことが望ましいといえるが、現在の社会学では各調査法が細分化・先鋭化しており、すべてに目配りをして調査を実施することが難しくなっている。ましてや一人で複数の調査手法を実施することは現実的ではない。そのため、現在、社会

学者が中心となって実施している社会調査では、社会学者同士あるいは別分野の研究者も積極的に巻き込んで、大規模なチームを組んでそれぞれの得意な手法を持ち寄って社会調査を実施することが増えてきた。

今後も調査手法の細分化と先鋭化がこれまで以上に進むことが予想されるので、大規模なチームでの社会調査の実施は増えてくることが予想される。社会という対象は曖昧であるからこそ、複数の手法で社会を描き出すことで、調査結果の社会像はよりリアルな社会に近づくことができるからである。

4. 社会調査はどこまで社会を調査できているのか

社会調査の魅力や面白さと同時に、受賞対象の連載記事では社会調査における理論的・実践的な困難についてもたびたび言及してきた。前者は、他者の合理性への理解や調査者の社会観の問い直しなどがキーワードとなるであろう。後者は、調査結果とリアルな社会の時間的ズレや、社会ですでに生活をしている調査者が有する認識的限界などがキーワードとなるであろう。

連載記事でも繰り返し主張したことだが、いかなる社会調査を実施しても〈完璧に〉社会を正しく描くことはできない。社会学者にかぎらず社会調査を行ういかなる主体も、社会調査をとおしてリアルな社会を寸分の狂いもなく精確に捉え記述することは難しく、かならず誤差を含んでしまう——少なくとも社会調査の結果を解釈するさいには、そのように考えたほうがよいであろう。

しかしながら、だから社会調査は信頼できないのだ、ということにはならない。むしろ、不完全にせよ、社会に迫る方法が社会調査しかない以上、そうした調査結果の誤差を含み込んだうえで、社会調査の知見を適切に解釈することが求められているといえるのではないだろうか。調査結果の妥当性を高めるために、個々の研究者には、調査プロセスを詳らかにし、相互批判に開くことが求められている。

社会調査は、調査を終えて分析・解釈をし、知見をまとめあげて社会のなにがしかを掴んだと思った瞬間には、もうすでに調査時の社会は姿を消して別の社会が現前していることがよくある。社会調査で得られる社会像は、つねにリアルな社会よりも半歩（以上）遅れてしまうことが運命づけられており、永遠に追いつけない競争を強いられているようなものだが、だからこそ社会調査を専門とする社会学者として、試行錯誤をしながら社会調査を実施することのやりがいもあるのだらうなと感じている。

*Saito Keisuke

Okayama University